

都市に住まう

都市に住まう カミッロ・マーニ

参照 | 本誌 pp.16-31

過去数十年の間にスイス諸都市は急速に成長し、住民と資本を引き寄せ新たな労働機会を生み出した。都市住民の割合は1980年の63%から現在のほぼ80%へと変化した。投資も都市部に集中し、チューリヒ、バーゼル、ローザンヌ/ジュネーヴの四大都市圏が突出している。しかしながら、こうした数値が示すのは複雑な経緯の一側面でしかない。人口増加あるいは経済成長より重要なのは、都市と都市に住まうことの真の再生を促す文化的成長である。自然に囲まれた牧歌的生活と結び付いた価値やステレオタイプは、スイス社会に深く根を下ろしているが、少しずつ力を弱め、はるかに住みやすく、アクセスが良く、気楽な都市に具現される市民的質に場を譲っていった。建築文化もこの新しい方向性を反映し、住宅というテーマが改めて中心性を帯びている。住宅の設計は、建設産業と建築研究における実験と革新の牽引役を再び担うようになった。本稿では紙幅の許す限り、スイス建築のこうした新たな時代の最も重要な特質は何かについて、いくつか考察を共有したい。そこで以下のページでは、マティス+カンブラーデとケフェルシュタイン&マイスターの作品に代表される都市住宅のテーマについて考察する。この2作は、参照できた多くの事例の中から悩みぬいた末に選ばれた。

1つめの特質は、タイポロジー研究に関係する。近年のプロジェクトでは、空間構成の議論と空間的クオリティの生成装置としての平面図の価値づけに対するマニアックなこだわりが目立つ。探求の目的は、合理化された居室の回復を最適化することであり、そのためにサービス・コアに住宅の「^{ウェットな}湿った」部分(キッチン、衛生設備、動線設備)を集め、機能的部分の柔軟性を生かす。屋内の動線システムは廊下の使用をうまく回避し、昼のゾーンと夜のゾーンとの伝統的な階層性を克服して、空間どうしの連続性をより高めている。マティス+カンブラーデの作品、あるいはチューリヒのオイロパアレーを紹介するページに載せたカルーゾ・セントジョンの見事な平面図には、より固定的な廊下に代えて、通り抜けの部屋の意識的な活用がはっきり見て取れる。階段やエレベーターという共有アクセスも、新しいタイポロジーを構築する契機となった。例えば、ローザンヌのルナン区ヴェルドー通りにドライアー・フレンツェル

ジュネーヴ・アナロジー都市 ミロ斯拉フ・シク

参照 | 本誌 pp.14-15

アナロジー建築はわれわれにとって連続性と習慣を表わす建築の一形態である。(……)基礎となるアナロジーの思想は、具体的なデザインを通して都市の多面的な顔を描き出す。われわれにとって、それが表わすのは込み入った無秩序でも、筋の通った人工物でもない。(……)アナロジーの基本的概念では、建築家個人の創造性を、気力を回復させ調和をもたらすことのできる詩的活動の中に捉える。「さらば、呪われた詩人たちよ」。都市環境はすでに、はるかに若いわれわれには、抜本的な介入をさらに許容するにはあまりに危険に晒されているように感じられる。現状はとても魅力的で、ナルシストたちの自己中心的様式に任せておけない。(……)伝統の勇気を、また特に直感の賜物を持つ必要があるだろう。それらは今日のナルシストが望みようのないものだ。(……)アナロジーによって、われわれは都市をそのフォルムに、できるかぎり手を加えずに伝えたい。試験管から外に出て、民衆芸術に浸ろうではないか! (……)また、われわれ建築家は——あまり若くない者も駆け出しの者も——この素晴らしい孤立状態を楽しもうではないか! この意識の目覚めを起点に、われわれアナロジー建築家は、民衆芸術の公理をすべて前進させることで一致している。このことを、大衆の好みへの倫理的、美学的服従と誤解しないでほしい。そうではなく、適切で包摂的な誰にも分かりやすい表現を推し進めよう、という提案と理解してほしい。キッチンあるいは代用品だからという理由で日常のヴォキャブラリーを



ミロ斯拉フ・シク「そして今アンサンブル」、スイス館、
2012年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展

糾弾するつもりは毛頭ない。その逆に、共同体にとって意味あるフォルムはすべて、われわれが歓迎すべきものである。なぜなら、そうしたフォルムだけが、不動産開発業者のサークルの外側で感じ取れる雰囲気や意味を伝達できるからである。(……)民衆的でアナログ的な芸術とは多元主義的傾向であり、そこにはさまざまな雰囲気と現象の膨大なレパートリーが浸み込んでいる。また同時に、これは折衷主義的傾向でもある。なぜなら、異なる伝統をもつ芸術作品を関係づけるからである。民衆的表現の実験が成功するとしたら、「物言う建築家」が抱く夢はいつか現実になるであろうし、それを表現するフォルムは政治活動の文化的手段として作動するであろう。

【出典】

『Werk und Zeit』4号、1987年、pp.14-15

図版と文章の掲載を快く許可してくださったルカス・イムホフ、クアルト出版社、ミロ斯拉フ・シクに感謝申し上げます。



左から右に: ミロ斯拉フ・シク:
聖アントニウス・カトリック・センター、エック、1988
ピア・ドゥリッシュ (ドゥリッシュ+ノッリ):
SSIC 職業訓練センター、ゴルドラ、2014
ヴァレリオ・オルジャーティ: クッヘル邸、1989-91
クイントゥス・ミラー&パオラ・マランタ:
ゴットアルド峠の旧ホスピス、2010
ヨーゼフ・スモレニキー:
ゼンパッハ湖ゴルフクラブ、ヒルデスリーデン、2008

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

の感性を非常にラディカルに表現し、コンテキストの痕跡を吸収する要素となっている。ヴォリューム・デザインの点では、この建物は道路と並行するコンパクトなファサードを見せ、ヴォリュームの両端に設けられた2つの機械室によって屋根が強調されている。この要素はケフェルシュタイン&マイスターの創作法に繰り返し現れる。階によって規模の異なる窓でデザインが構成されている。レストランには大きな上げ下げ窓を使い、夏場でも屋内と屋外の浸透性を高めている。2階と3階のオフィスは全面ガラス窓から採光する。ガラス窓には上品な黒い鉄製の手摺りが付いており、三分割された外側の細いサッシュ枠のみ開閉できる。ヴォルティーノ[開口部の上縁に煉瓦等を縦方向に並べたアーキトレープの一種]にコンクリートと赤レンガ色の鉄を使い、違いを出している。4階では窓の色と大きさが変わり(白く幅が狭くなる)、日除けと2つのバルコニー・テラス(テラスには両脇のドアからしか出られない)がついている。アテック階には切妻屋根がかかり、昔ながらの四角く細長い銅製の屋根窓が並び、二連窓枠の上部は屋根窓に、下部の小さい部分は柵で保護されて、ファサードにそれぞれ組み込まれている。軒は近隣の建物の庇と揃えられ、白い鉄製パーゴラのついた大きい共有テラスが最上部についている。ファサードの複雑な構成は、基壇のモザイク状の石片の抑揚ある並べ方とともに、外壁のアクアグリーン色をした粒の大きいプラスター仕上げとコントラストをなしている。これは周囲に見られる豊饒なデザインの明らかな引用である。南ファサードは構成要素のデザインを統一することで、北ファサードと差異がつけられ、その代わりにヴォリュームに最大限の抑揚が加えられた。屋内では外観の複雑さが反復され、エントランス・ホールのように、いくつか近代建築からの引用で飾られている。その成果は、立地環境に根差したプロジェクトであり、周囲を囲む要素との緻密な対話をつくり出し、マニアックなまでに豊富で膨大な数のディテール(雨樋、軒、持ち送りの接合部、鉄、室内……)が特徴的である。そこに建築家たちの創作法が現れている。これはフォルムと素材の因襲性を用いて、並外れた建築を建てる洗練された方法である。「この方法論は、おそらくポスト・モダンではなく、むしろアナロジー建築の道具箱のほうに属している。この建物がフォルマリズムに抵抗できるのは、建築の奥深さを追求し、フォルムの表層性を避けるアプローチのおかげである」(ケフェルシュタイン&マイスター)。

「ウシュターの集合住宅/オフィスビル」

設計=ケフェルシュタイン&マイスター

参照 | 本誌 pp.19-24

作品:ウシュターの集合住宅/オフィスビル

設計:ケフェルシュタイン&マイスター・アルヒテクテン

プロジェクト・マネージャー: Caretta + Weidmann Baumanagement AG

構造: Büro Thomas Boyle + Partner AG

建設主: Speich Immobilien AG

スケジュール: 設計 2015年11月/ 施工 2017年9月-19年9月

規模: 建築面積 2,735m²

所在地: Bankstrasse 1,8610 Uster, Zürich, Swiss



各階平面図



メイン・ファサード



建物上部を見る



アテック階:リビング・エリア



地上階:エントランス・ホール

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

「クレームラッカー小学校」設計=ロジャー・ボルツハウザー

都市の学校 マルコ・ピアージ

参照 | 本誌 pp.53-60

ロジャー・ボルツハウザーはチューリヒに事務所を構える56歳の建築家で、スイスとドイツの諸大学で教えた経験の持ち主だ。彼は情熱的で洗練された作家である。彼の職能思想は基本的に、建物、構成要素や素材の並べ方とつながり、表面の仕上げのシンタックスに向ける揺るぎない視線に表れる。コンセプトや形象よりも、建築の具体的なものとディテールに関心を注ぐ姿勢において、ボルツハウザーは概して合理主義的フレームあるいはコンクリート壁でできた箱の堅実な仕組みを用いるが、全体の楽譜のなかに大小の変奏や実験的な技術的解を挿入する楽しみにいつも没頭する。そうした要素によって、緻密な物質性を持つ彼の作品の寡黙な幾何学が具体化される。その堅固で安定した物質的存在は、一目見ただけで1枚の写真から受ける全体の印象よりむしろ、何度も足を運び、時間をかけて発見しながら真価を理解す

べきものである。そのためか、おそらくこれまで、ボルツハウザーの建築家としての歩みはおもに、日常的存在という彼の性格に合った主要テーマにつながっていた。つまり住宅、労働の場、研究と教育のための空間である。

チューリヒから20km離れた小都市ウシュターに完成したばかりの小学校は、この作家の設計姿勢をじつに雄弁に語っている。教室のブロックと、小スケールの建物からなる周囲の街並みに合わせた背の低い体育館からなる新校舎は、1957年に遡る既存の中学校と合わせてひとつの学校を形づくる。4つの校舎がH型に並び、用途によって違いを持たせた屋外エリアを囲む構成である。本校舎は、道路に近い端部が前面に高く突き出したヴォリュームと、敷地の内側に伸びる3階建ての直線的なヴォリュームとに分かれている。最初のヴォリュームには生徒用の玄関ホール、図書館、事務室、特別教室、職員室が置かれ、屋上庭園への連絡路がある。2つめのヴォリュームは1階に幼稚園と幼児向けデイサービス・センターが、残りの2階には教育用クラスターが設置されている。各クラスターは3つの教室と、学習空間を柔軟に変えるため可動壁で仕切られた2つのグループ教室から構成され、

ラーニング・ランドスケープや動線と避難路を兼ねた自由エリアを備えている。体育館は、学校の時間割外に利用できるように教室棟から離されている。半地下の箱のような建物で、地表面から突き出し、周囲を広く四角いガラス壁で囲まれている。市街地道路に面した南西側に駐輪用のボルティコがあり、地下階に連絡する玄関口の役割を果たす。地下には更衣室と倉庫が置かれている。1階には厨房を備えた多機能ホールがあり、バルコニーを挟んで、2層吹き抜けの屋内体育館の大空間に面している。体育館の格間天井の裏面には同一方向に並べたトラスが隠されている。

建築的ヴォキャブラリーは、骨組と仕上げという二項関係の構造的解釈に与えられた中心性によって、オーギュスト・ペレの記憶を呼び覚ます。ここに使われた部材と素材は厳選されているが——現場打ちされた鉄筋コンクリート補強材の芯と結合された、プレファブ・コンクリートの柱や梁、プラスター仕上げの壁、ガラス・ブロック、煉瓦による中空瓦——、配合のメカニズムと部分ごとに打ち立てられた関係は多種多様に見える。ファサードの構成には、構造フレームの突出部と表層の共面性のわずかな



教室棟ファサード



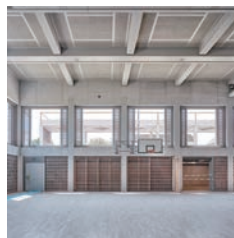
体育館側より見る



道路より見る



ボルティコ



半地下の体育館



上階の通路スペース



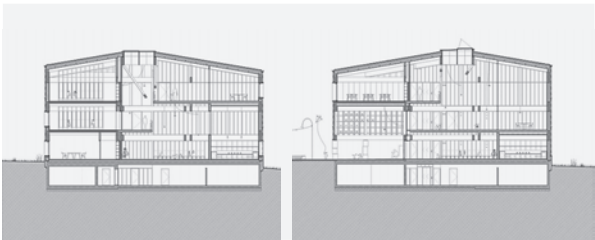
グループ教室

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

ただし性能アップのため、局所的に複合構造も許容されている。例えば、木とコンクリートの混構造スラブでは、9cmの補強ブロックを加えることによって、水平構造の厚みを減らし、断熱と遮音の効果を高めている。とは言え、建築家たちが設計の力を特に注いだのは「環境順応」のテーマである。学校建築の共同体的次元に子供を順応させることは、中央ファサードに特徴的な空間造形を施すことで追求され、伝統的に構築された風景に建築を順応させることは、全体のデザインと外被のディテールの効果的な伝達力にゆだねられた。1つめの子供の順応について、ベレスとマイヨールは樹木のような柱のトータムのイメージと、軸からずれながら回転するバルコニーが8×8mの正方形の堅固な幾何学の上に描く動きを活用した。バルコニーは、円形に型取られ平滑に磨いたコンクリートでできている。2つめの建築の順応の場合、彼らは、上品だが明らかにパロディに見える点で十分に説得力ある「ハイマートシュティル(郷土様式)」の、非常に冷静な解釈に賭けた。目地板の浮き出しによって強調された羽目板による外壁の垂直分割が、開口部の構成を部分的に和らげている。屋根のシングル材の燕尾形モ



1-2階平面図



断面図

チーフは、湿気をパネルの中央に向かわせ浸透を防ぐためのものだ。透かし細工のような幾何学装飾、光り輝くブリキの配管、エントランス・ロτζジアを支える2本の台座の、「空」積みされた人造石——これらはすべてヴァナキュラー法典からの転写であり、その目指すところは、「ヴェンチュウリのやり方で」建築物をその用途について「説得力ある」ものにする事なのである。

作品:オルソナンの小学校

設計:TEd'A アルキテクトス——イレネ・ベレス、ジャウメ・マイヨール

協働者:Toni Ramis, Tomeu Mateu, Margherita Lurani,

Teresa Piferrer (TEd'A arquitectes)

ローカル・アーキテクト:ラバン・サイス・アルシテクテ

木構造:Ratio Bois | コンクリート構造:2M Ingénierie Civile

電気設備:Bureau d'études en électricité Bernard Bersier

暖房設備:Sacao | 土地測量:GéoSud SA Glâne

音響:Ecoacoustique

ファサード:X-Made – Material and envelope design

建築主:Commune de Villorsonnens

スケジュール:設計競技 2014年/

設計 2014-16年/施工 2016-17年

規模:延床面積 2,450 m²

所在地:Route de Chavannes, 29, Orsonnens,

Canton de Fribourg, Swiss



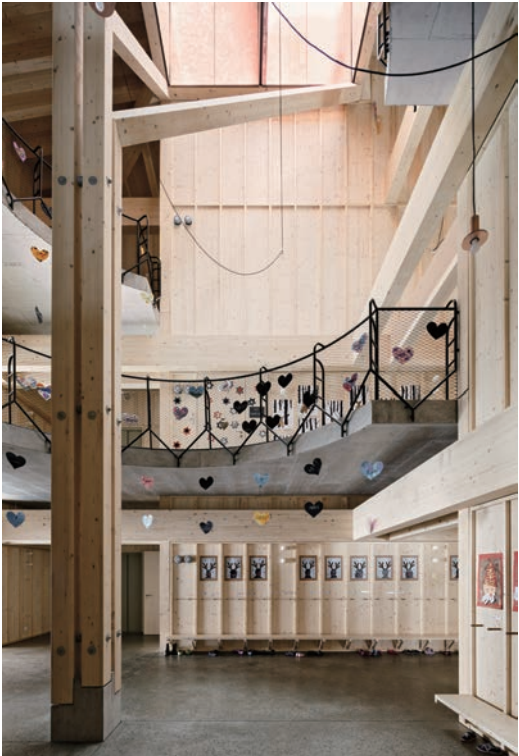
南側ファサード



ロτζジアの足元廻り



南西隅に設けられたロτζジア



中央アトリウム



上階のサービスゾーン



最上階の教室内部

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

スイス、展示される国家

1986-2021:ミュージアムの35年 フェデリコ・トランファ

参照 | 本誌 pp.87-94

現代スイス建築の成功は、そのミュージアムのおかげでもあると言っても過言ではない。国家とミュージアム組織との絆は、近代的な連邦国家の建設およびその国際的観光の解禁と同時に生まれている。鉄道網の整備によって大半が山岳地の国土はアクセス可能となり、スイスをアルプス的風景のミュージアムに変えるのに寄与した。そのパノラマ風景は、芸術を介して、万人が称賛する作品になった。今日でも、「シュヴァイツァー・ハイマートシュッツ（スイス郷土遺産保護協会、SHS）」が最も美しい場所を集めた新書シリーズを出版しており、そこにはミュージアムも含まれている。遺産監督局によると、スイス最高峰のミュージアムはしばしば、「人間活動と自然の作用の痕跡と物理的産物を知らしめる隠れた宝庫」となっている。少なくとも美術館が、こうした特異な性質に加えて、コレクション作品との対話を通してそれぞれの時代を解釈する力を提供している。この達成困難な目標により、優れた建築家たちの才能に光が当てられた。現に、ミュージアムの設計を通して、ジャック・ヘルツォーク&ピエール・ド・ムーロン、アネット・ギゴン&マイク・ゴヤー、あるいは最近では、エマヌエル・クリストとクリストファー・ガンテンバインは評価を勝ち取っていった。仮に自由が、表現する才能を建物の卓越さや潤沢な資金と結び付ける可能性を意味するとするなら、スイスの美術館はおそらく、この国の現代建築が最も自由に自己表現できる空間を意味している。今日のスイス建築は、ミュージアムを通して、その時代精神の成功を表現している。それは第二次世界大戦後のイタリアで、新世代のミュージアムやギャラリーが国家の名刺となったのとまったく同じである。それは芸術遺産を趣味、素材、フォルムの同時代性と対話させることのできる建物だ。今は、国際的な大規模ミュージアムもグローバルな観光システムから逃れられず、それらが商業施設か空港（相互に混ざり合う段階にある2つの建築カテゴリー）にますます似てくるという事実はあるものの、スイスのミュージアムの特徴は、その中身と関係なく、特異で記憶に残るものになることである。ピーター・ズントーは、まずプレゲンツ美術館によって、続いてケルンの聖コルンバ大司教区美術館によって、パリのボンビドゥー・センターでピアノとロジャースの解釈が大成功したファン・パレス[セドリック・プライス]の

モデルを、暗に批判した。古典建築とその構成要素や伝統的な素材の再読は、ロンドンの新テート・モダンのためのヘルツォーク&ド・ムーロンの設計案も無視できない。ここで彼らはアウトサイダーという役目をもって、巨大なバンクサイド発電所を最小限不可欠な部分しか保存しようとしなかった他の建築家を打ち破り、センセーショナルな結果を勝ち取った。スイス国内では、ミュージアムは最大級のものから最小のものまで、卓越さのネットワークと重要な建築目録を形づくっている。そのすべてがスイス人建築家の設計というわけではなく、現にバーゼル美術館もドイツ出身のパウル・ボナーツという外国人建築家の作品である。スイスの優れた組織は、どの国のパスポートを持つかに関係なく、質の高い建物を実現するために不可欠な2つの資源を建築家のために用意している。すなわち、適切な手段と高レベルの対話である。スイスの美術館は、総体として異種混交的な機構を象徴する。そこでは、1992年に芸術家ハンス・ヨーゼフソンの彫刻を展示するためにピーター・メルクリが設計したラ・コンジュンタのように規模の小さな空間や、2000年から2016年にか

てクリスト&ガンテンバインが修復・増築したチューリヒの国立博物館のような複合施設が共存している。衝撃的なのは、どの事例でも、連邦文化局と地元行政がミュージアム分野に投資する確固とした姿勢である[注]。だが、ミュージアムの建設がミュージアムの設置を意味するわけではない。全体としてみると、スイスのミュージアムは出会い、学究、訪問、喜びの場を体現している。図書室は快適で、カフェテリアは居心地がよく、庭を訪れる人は一年中後を絶たない。ミュージアムは教育制度と対話しながら市民を育成し、研究を行い、出版物や展覧会を世に送り出す。こうした必要性が理解されず、奨励されず、評価されない国は、文化的に後退した国になるだろう。その正反対にスイスの特徴づけるのは、この国の教育・文化制度への深い信頼である。さらに、建築的観点からもミュージアムは副次的なものではなく、建築デザインを実験するための特権的な主題を意味している。

本稿では急ぎ足でスイスのミュージアム建築を概観し、もちろん十分ではないものの、比較的短期間で明らかになった多様な方向性を可視化した。フォルムの強烈な異



ピーター・メルクリ：ラ・コンジュンタ、ティチーノ州ゾルニコ、1986-92



アドルフ・クリシャニッツ：リートベルク美術館、チューリヒ、2003-06



ギゴン&ゴヤー：キルヒナー美術館、ダヴォス、1989-92



クリスト&ガンテンバイン | チューリヒ国立博物館、チューリヒ、2000-16

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan